飯豊町長
後藤幸平

×

置賜自給圏推進機構代表理事
高畠町有機農業提携センター
渡部 務

鼎（てい）新春談（だん） 置賜自給圏

～循環と連携によるアルカディアを目指して～

新年号特集

置賜自給圏推進機構とは

飯豊町を含む３市５町によって構成された置賜地域。ここを一つの「自給圏（必要な物を自らまかなう範囲）」と捉え、圏外への依存度を減らし、圏内に豊富に存在する地域資源を利用、代替していくことによって地域に産業を興し、雇用を生み、富の流出を防ぐ。このような地域経済の好循環を生み出す新たな視点に立った地域づくりを進めようと設立されたのが「一般社団法人 置賜自給圏推進機構」です。

一般社団法人 置賜（おきたま）自給圏 推進機構

●役員（平成26年８月２日推進機構設立時点）

代表理事（２名）

・高橋幸司氏（山形大学工学部教授）

・渡部　務氏（高畠町有機農業提携センター）

その他役員（総勢29名）

・副代表理事、専務理事、常務理事（後藤町長も）理事、監事

●事務所

〒992-0031

米沢市大町四丁目5番48号（マツヤ書店ビル３F）

TEL 0238-33-9355　FAX 0238-33-9354

✉ mirai21@trust.ocn.ne.jp

http://www.okitama-jikyuken.com　置賜自給圏　検索

置賜自給圏推進機構代表理事
山形大学工学部教授

高橋幸司 ×

昨年８月、エネルギーと食、住の地産地消を活動の柱とする「一般社団法人置賜自給圏推進機構」が設立されました。置賜地域を自給圏と捉え、圏内の地域資源を利用・代替して圏外への依存度を減らし、地域に産業と雇用を生み、地域経済を好転・持続させようとする「地域循環型社会構築」を目指した団体です。そして後藤町長はその常務理事に就任しました。

推進機構の活動趣旨は、町が昨年度全国に募集した企画提案論文「飯豊・農の未来賞」の受賞２論文の根幹となる〝置賜地域の連携による自給圏〟と〝自給自立的農業〟構想に合致します。

グローバル化と自由競争、富の一極集中を経て置賜地域に生まれた「自給圏構想」は、農山村活性化の新たな視点、新たな方向を指し示すものに感じられます。

新春対談として、推進機構共同代表のお二人を招いて、設立に至る思いや、現代の農山村に暮らす人々に求められる心構え、今後の抱負などについて町長と語り合っていただきました。

聞き手◎役場農林振興課長　伊藤毅

高橋幸司×後藤幸平×渡部　務

聞き手　明けましておめでとうございます。本日は置賜自給圏共同代表の高橋さん、渡部さんにお越しいただいて、飯豊町の話題に触れながら、日頃ご活躍の自給圏をテーマに据えてお話をお聞きしたいと思います。

―飯豊町の印象について、お聞かせください

高橋幸司氏（以下「高橋」）　磨けば輝く宝の原石がいっぱいあると感じています。散居集落、ゆり園、中津川の美しさ、農家民宿の取り組みも素晴らしいと思います。一つ一つは非常に素晴らしいがそれらがつながっていない、生かし切れていない気がします。また、山形大学の立場で言えば、蓄電デバイス工場の誘致など、ポテンシャルの高いものが出始めているとも感じています。

渡部務氏（以下「渡部」）　私は農家なので農業分野だけで言えばいろいろな素材をお持ちだと思います。とりわけ米沢牛の中心的な役割を担っておられる。ただ、情報の発信というか、その素晴らしさがなかなか外部には見えてこない印象があります。一方、若い方々が一生懸命頑張っておられるようですね。農協青年部の方々が都会の学校との交流事業をダイナミックにされ、その延長線上に杉並区の高円寺に飯豊町のチャレンジショップが出来上がったとお聞きしました。さらに昨今の中津川地区の取り組みなど、以前のイメージとはだいぶ変わってきているとも感じています。

後藤幸平町長（以下「町長」）　思い切ったアドバイスありがとうございます（笑）。この機会に一つご紹介したいことがあります。飯豊町は「住民参加のまちづくりをしている」ことです。それぞれの地区ごとに5年、10年期間で、住民が地域計画を立てて実行しています。町はサポート役として計画実現に財政支援し、これがずっと続いています。

―農山村の現状をどのように捉えられていますか

高橋　多くの農山村が人口減少によって限界集落に陥る不安を抱えています。喫緊の問題はそこに暮らす人たちの生活の足をどうするかですね。スーパーなどが少なく隣の市までの買い物や車を運転できない高齢者など、不便を強いられている方々に何らかの方法で生活の足を確保することが大事だと思っています。集落存続で飯豊町から学ぶべきことは多いと思います。中津川などは農家民宿を中心に外部に開かれた農村を作り上げています。さらに発展させる方法の一つとして、地域を超えて使える地域通貨が考えられます。都市部の若者がここの雪祭りを手伝った際に、そのアルバイト代として地域通貨を渡す、その若者が高円寺に行ったらそれが使える仕組みができたら独自性と面白さが出て、さらに人を

惹きつける地域になると考えます。

渡部　今日の低米価に象徴されるように農山村は苦戦しています。少しでも上向きの方向にするには、地域住民が自信を持つことが一番大事だと思います。私たちが有機農業を約40年間続けられたのは、都市との交流で「おいしかった。高畠の風景は美しいですね」と言われて自分たちが自信を持ったこと。その繰り返しから「これならやれる」との思いを抱いたからです。また、農山村では、農業も大切ですが、やはり林業をどう立て直すかが非常に重要です。大工さんと話をすると、この辺の新築住宅物件の約8割は大手ハウスメーカーだそうです。こんなに杉林がありながら生かされていない。ハウスメーカーの下請けの地元大工さんは、伝承されてきた技術を生かすことなく働かざるを得ない。家を建てるとき林業と絡めた流れをどう作っていくかが重要です。農村全般についても必要な方向性だと思います。

町長　現状については3人とも共通していますね。飯豊町は田園散居集落の美しい景観を町の誇りと自慢にしてきました。ところが、田園散居集落の主役は農家なのだけれども後継者がいない現実がある。私は就任以来「かつてのにぎわいを再現しよう」とずっと言ってきました。ところが若い人たちにとっては、〝かつてのにぎわい〟が分からない。彼らが育った時には、商店街はまばらな人通り、多くの店が無くなっていたなど、すでに人口減少の中で成長してきたのです。

―置賜自給圏推進機構設立への思いをお聞かせください

高橋　私は工学部に所属していますが、大学本部直轄組織の「東北創生研究所」のメンバーにもなっています。研究所設立のきっかけは東日本大震災。東北地域でひどい震災を受けた中、山形だけがあまり被害を受けなかった。学長は、客観的な立場で被災地の復興を一番考えられるのは山形だけと考え、研究所を創設しました。研究所が目指すのは「自立分散型の社会を作る」ことです。推進機構とまったく同じです。

渡部　私たちが有機農業研究会を立ち上げたきっかけは減反政策とオイルショックです。機械化や化学肥料・農薬を多投した近代的農業の流れに沿って農業を行っていたが、減反施策で180度変わった。また、昭和45年ごろに私は肥育を始めましたが、輸入飼料に頼っていたためオイルショックで大赤字になりました。これらを経験して、このままの農業で食べていけるのかを仲間で議論しました。そして、それまでは与えられたもので農業をやってきたこと、これからは自分たちが主体性を持って農業に取り組む決意がないと生業にできないとの結論に至り、有機農業を始めました。自立の考えは食やエネルギー、林業の問題など、いろんな問題の基本に据えていくべきだろうとの思いを持って自給圏に携わっています。

高橋　震災のとき、停電で何もできない地域や、ガソリンや食べ物が無くなった地域がたくさん発生しました。福島原発も東北地域にあるのになぜ東京電力なのか。もっと地域の立場や自立の必要性に気づかないといけません。

渡部　おっしゃる通りですね。東京の人が東京で使う電力が福島で作られていたことを初めて知ったと投稿に載るわけです。長井のアマチュアフォークソングループ影法師の唄に「白河以北一山百文」がある。廃棄ごみや原発など私たちが要らない

高橋幸司×後藤幸平×渡部　務

物ばかり持ってくる趣旨の歌詞はとても説得力がある。

町長　お二人のお話をお聞きしてつくづく感じることは、地産地消と自立の必要性です。飯豊町でもそれが大事だと気づき始め、「飯豊・農の未来賞」でも改めて行きついた結論です。町では、広域連携の下に自給力向上を考えています。これまで飯豊町は産業、子育て、教育、高齢者や道路など、あらゆる環境整備やサービス拡充をやってきましたが、それでも人口が減る。1自治体で対策を練ってもどうにもならない問題なのです。推進機構の設立は、誰もがぼんやりと思い描いていたことを東日本大震災を経験したことでようやく形となった。画期的なことだと捉えています。

―置賜自給圏を進めていく上で重要なポイントは何でしょうか

高橋　連携だと思います。推進機構には多様な人材が集まっている。連携の工夫で経済を回すことも可能です。たとえば、直売所と組んで売れ残った野菜を少し安い価格で買い取り、仲間のレストランで引き取って加工して提供するなど。推進機構の一番の役割は、アイデアを出し、それを多様な職業の多人数が関わり合って実現し、経済を循環させていくことだと思います。

渡部　そうです。連携から強みと良さを生み出すことだと思います。有機農業を通して、消費者は原料や加工過程の実態が見えづらい外国に頼った食品より、国内産・国内加工品を求める傾向が非常に強いと感じています。この方々に訴える物を我々は作る必要があります。生産だけではなく加工して売る6次産業への挑戦も農家は求められているのかもしれません。ただ、マーケティングや加工技術は農家にはなかなかないわけで、補完するためには地域内の様々な人や企業などと連携することが大切で、そこから生まれる強みと良さを含めて販売できる仕組みが必要だと考えます。

町長　高畠町で素晴らしいのは、有機農業や農山村への関心が高まって来町者が増え、移住・定住までの流れになっていることです。

渡部　高畠に定住した人たちのアイデアは素晴らしいですね。土地の人たちがなかなか思いつかないようなことがポンポンと出てくる。また、その発想が高畠の良さを気付かせてくれる。彼らの能力をうまく生かさなくてはと強く感じます。

町長　なるほど、まさにその通りです。言葉を変えるなら「森と村が一番新しい」との着想、発想の転換ですよね。森と村は昔からあり過去に置いてきたものだと思っていましたが、実は最先端だった。推進機構ではそれをどう掘り起し地域の活力源として使いこなしていくかですね。課題は人材だと感じています。色々なアイデアや資源がある、では誰がやるんだとなったとき人がいない。そこが課題だと思います。何か打開策や良いアイデアはありませんか。

渡部　推進機構にはいろんなアイデアを持っている人や実践している人がいっぱい集まってくる。少しずつでも変化を起こせる力になるのではと期待できます。

高橋　人材の話が出ました。人は多かれ少なかれ新たなアイデアを出す能力があるんだと言われています。それが十二分に発揮されていないだけなんです。各地区で行っている地域づくりのワークショップに我々が入り込んで、一歩踏み出すところまでお手伝いをさせていただくことができるのではと思います。

―置賜自給圏の意識を広めるためには何が大切なのでしょうか

渡部　私は農村社会で事を起こす場合、理屈だけでは始まらないと考えます。実績を積み上げてそれを見せないと人は動きません。有機農業も、農薬を使わなくても米はそこそこ穫れるし病気にもならない実績を見せて初めて「なるほど」となる。自給圏の意識を広めるためには、そういった実績を見せることが非常に重要だと思います。

町長　小さくても成功実績を形にする。飯豊町もきちんと若者に、この地でこうすれば将来が開けるといった、定住意欲を呼び起こす実績を示すことが必要で、山形大学の蓄電デバイスセンター誘致がその一つになればと考えています。

高橋　蓄電池で言えば、研究施設で使用する部品を地元企業に作ってもらいたいとき、施設側が、自分たちが求めるレベルに地元企業が到達できるまで指導することが必要だと思います。そこまでいったら雇用は生まれます。若者にとって飯豊町は農業のイメージが強い。やはり農山村で暮らすことを考えたとき、人間らしい暮らしができることが一番の魅力だと思います。

町長　時間と心のゆとりですね。そのためにも置賜自給圏を実現する必要があります。自分の職業や地域だけで頑張るのではなく、多くの人を巻き込んだ地域内循環の成功が必要だと考えています。自給圏の成功は圏外から人を呼び込む流れを生み出すものと期待しています。「自給圏」は誤解されやすい言葉で、閉鎖的で内

高橋幸司

Koji Takahashi

〇昭和27年７月岩手県盛岡市生まれ〇昭和50年東北大学工学部卒業、昭和52年同大学大学院修士課程修了、昭和55年同大学院博士課程単位修得上退学、昭和56年同大学工学博士〇昭和55年東北大学助手、昭和57年同大学講師、山形大学講師、昭和59年英国バーミンガム大学研究員、昭和62年山形大学助教授、平成11年山形県職員、平成14年山形大学教授、平成24年同大学東北創生研究所産業構造研究部門長、平成24年置賜自給圏推進機構代表理事

▶お勧め本：池宮彰一郎の歴史小説、貴志祐介のホラー小説▶休日の過ごし方：愛犬とのふれあい▶好きなスポーツ：ゴルフ

渡部　務

WatanabeTsutomu

〇昭和23年12月高畠町生まれ〇昭和42年県立置賜農業高等学校卒業〇昭和42 年就農、昭和48 年「高畠町有機農業研究会」設立、平成８年「高畠町有機農業提携センター」設立。平成10 年合宿小屋「さと小屋・みず穂」を建築し毎年100 名以上の研修生を受け入れながら有機農業の意義と食の大切さなどの食農教育を実践。平成24年置賜自給圏推進機構代表理事、現在は妻と共に、稲作615a（うち有機栽培153a）、啓翁桜、100 品目以上の野菜を栽培。

▶最近のお勧め本：若月俊一「村で病気とたたかう」▶休日の過ごし方：時間があれば妻と一緒に温泉めぐり▶好きなスポーツ：全般的にスポーツは好き、特に柔道。▶Happyなこと：生産したお米などを食べたお客様からの「おいしい」の言葉

に閉じこもるという見方がある。そうではなく、グローバル化と自由競争、ヒト・モノ・カネの一極集中の経験を踏まえて、これからは外部への依存をできるだけ減らして近い所で供給していくんだ、それが農山村のこれからの生き方なのだという、新しい視点に立った実に斬新な取り組みなんです。

―今年の抱負と飯豊町へのメッセージをお願いします

高橋　抱負は、小さな成功事例を作り出していくこと。その時に子どもを巻き込んだやり方ができればいいなと思います。成功実績によって置賜自給圏への賛同者が増えてほしいですね。それと、自分たちの地域をどうしたら良くなるかの話が、あちこちで活発に出るような地域になってくれればいいと思います。飯豊町には素晴らしい宝がたくさんあります。それを見つけ出し、良さに磨きをかけ、そして自信を持ってください。

渡部　産直・直売所を舞台に、単に物流だけではないコミュニティーの場を地域の中に作り上げていきたいと思います。CSA（Community Supported Agriculture：地域で支える農業）のような活動を通して、地場生産で顔の見える関係を作り上げて、地域で暮らしている人間が互いに支え合っているんだとの共通認識を持てる形を作り上げたいと思います。飯豊町の皆さん、「農業は未来産業である」との確信を持って、知恵を出し合いご奮闘を！

町長　ありがとうございます。置賜３市５町で歩調を合わせて、みんなでやろうと呼びかけていきたいと思います。本日のお話を飯豊町のまちづくりに生かして益々よい年にしていきたいと思います。

三人　今年は未年。未来の「未」ですね。明るい未来へ一緒に進みましょう。

鼎談中の様子（がまの湯温泉いいで旅館の一室）